



光田新書版

和田芳恵

小説みだれ姫

小説 みだれ髪

★定価はカバーに入っております

《検印省略》

著者 和田芳恵

発行者 豊島 澁

印刷者 秋田 宗慶

発行所

株式会社光風社書店

東京都千代田区神田錦町三ノ十四
電話東京(翌)〇二三八番
振替東京一二九一三番

落丁・乱丁は御取替いたします。

目次

帳場格子のなかで

薄くれないの

遠くのひと

匂いあるしずく

砂の音

雲と菜の花と

そのむらさき

花
野

セ

二四

三

元

五

七

八

七

梅というな

一〇五

ふた夜妻

一〇三

麦　　笛

一〇六

燃ゆるがままに

一〇九

みだれ髪のひとつ

一一七

野にさけぶ

一一九

あらそいの家

一二六

黄金の釘

一二四

さ表紙・
し扉
え

カ
バ
ー

三
井
永
一

難
波
淳
郎

小説
みだ
れ
髪

帳場格子のなかで

堺市甲斐町の菓子商駿河屋の娘しょうは、帳場格子にかこまれた帳台の前に、少し前かがみに坐っていた。すぐ上の姉はながとつぐと、間もなく、そのあとを引きついで帳面役になったが、しょうは、そろばんや計数が得意なので、それほど億劫とおもわなかった。

（お姉さまが嫁入りしたのは、わたしが十二のときですもの。仕事が身につくのもあたりまえね）
しょうは自分に言いきかせながら、せっせと書出を書いたり、手垢にまみれた大福帳をつけていた。

駿河屋は角店なので、西と北に紺ののれんをさげた二つの入口から、客が出はいりして、いつも、店先きはたてこんでいた。髪をおたばこぼんに結ったしょうは、近くの宿院小学校へ通った。そのころは、男の子と喧嘩しても、まけないほど、やんちゃな娘であった。

そのころ、庭にござをしいた、物静かなままごと遊びにあきた、しょうは、あき樽をふたつ並べて板をわたし、その上で同級生の勘太とままごと遊びをしていた。

しょうは、

「勘ちゃん、待っておいで」

と言いついて、菓子子の製造場へもぐりこみ、手ばやく餡を盗んできた。竹皮につつんだ餡がはみだして、しょうのふところにこびりついていた。

桜の花は、風もないのに、はらはらと散りかけていた。

遊び仲間の勘太は、すべすべした桜の幹へのぼり、皿にするため、葉をちぎってきた。

「しょう子さんの手がきれいだもの、この葉っぱの皿に盛りわけておくれ」

勘太は、ほっそりと伸びた、しょうの指を見た。

「あいよ」

しょうは氣がるに答えて、勘太がならべた葉の皿に、器用に餡を盛りつけていった。

「おあがりよ、勘ちゃん」

少し、うわ向きの鼻をふくらませながら、しょうは、得意げに顔をしゃくった。

勘太は、庖丁をつくる鍛冶職の息子であった。

「しょう子さんは、いいなあ。いつでも、うまいもんがたべられて」

食べざかりの勘太が、つぎつぎと餡を平らげてゆく速度を、しょうは快く眺めながら、

「勘ちゃん、そうでもないのよ。売りものは、どこの家だって、大切にするからね。傍で考えるようなものじゃないのよ。これだって盗んできたのよ。やはり、花よりだんごね。それにしても、この石川五右衛門は、絶景かなと見得を切るには、小粒すぎないこと」

と言つて、ことごと笑つた。

芝居小屋には大阪歌舞伎がかつたばかりで、「ごんごんごんごん楼門五三桐」で覺えた、五右衛門の見得を、宿院小学校の生徒たちは真似ていた。勘太は、印をむすびながら、目玉を寄せることもできた。

「勘ちゃん、絶景かなを見せとくれ」

口のまわりに餌をこびりつかせた勘太の見得には、おどけた愛嬌があつた。しょうは、のけぞるようにして、ほほほと笑いこけた。海からの照り返しを受けた浅黄いろの空を、ゆつたりと白い雲が流れていた。散りかかる桜の花びらは、上氣したしょうの頬にはりついてた。

「わたしのふところは、餌でべとべとなの」

あぶなかしいが、見晴らしのいい、このままごと遊びを、しょうは、もう、やめようと思つてた。

「どれ、見せとくれ」

勘太は体を乗りだしてきた。

しょうが胸もとをひろげた絹の裏地へ、勘太は尖らせた口を持ってゆき、こびりついた餌を強く吸いはじめた。紅絹の裏地は、勘太の歯にしごかれて、きゅっ、きゅっと哀しい音をあげたりした。

短かく刈り込んだ勘太の頭は、日向くさかった。

「勘ちゃん、止して……」

勘太の頭髮が、しょうの小さい、やわらかな胸を、ちくちく刺した。

「後生だから、止してよ」

あえぐように言つて、しょうは体をくねらせながら、肌がしつとりと汗ばんできた。眼がくらむようであつた。

勘太を押しつけようとした、しょうの腕が、どうしてか、思うようには動かなかつた。

「しょう、なにをしておいでだい」

縁側に母のつねがたつていた。

しょうは、くつろげた胸もとをなおしながら、素早く、台から飛びおりていた。

「しょうは、こちらへいらっしゃい。もう、勘太さんと遊ぶことはなりませんよ」

勘太は、つねに向つて、へえと小腰をかがめ、低くお辞儀をするや否や、ぱつと逃げ去ってしまった。姿の見えない勘太に、「また、遊びましょ」としょうは声を投げかけた。

しょうは、母の居間に連れこまれていた。

「勘太さんと、なにをしておりました。かくさずに言つてごらん」

つねの顔は、怒りと不安のために蒼白くなつていた。

「なにもしておりません。ままごと遊びをしておりました」

「ただ、それだけ」

つねの眼が、執拗に、しょうの胸もとにからみついてきた。その眼を避けて、壁にはめこんで並べられた、桐の衣裳簞笥を、しょうは眺めていた。

「勘ちゃんは、いい子なんです。小学校を卒えたら、鍛冶屋へ弟子入りするそうなんです。どうして、勘ちゃんと遊んではいけないの。お母さまがとめても、わたしは勘ちゃんと遊ぶつもりよ。どうしても、わたし、勘ちゃんと別れるのは、いやです」

「また、しょうの強情がはじまりましたね。言うことを聞かなければ、お父さまに叱っていただきますよ」

しょうの胸のあたりに、まだ、勘太の熱い息づかいが残っているようであった。これは、ほんの偶然がきっかけとなっておきた事件であった。しびれるような快感が、しょうに口をつぐませた。

（男の子が女の子の着物についた簞笥をしゃぶるなんて、おかしいことだわ。それに、勘太さんはずかしめることになる）

しょうは、黒い瞳を、またたきながら、青く剃りおとした母の眉を見つめていた。

「あなたは、まだ、娘ですからね、からだをきれいにしていなければいけません。よいお婿さんをお迎えするまではね」

しょうを追究することを、つねはあきらめたらしかった。

（誰の眼にもつくところで、勘ちゃんとなにができるというのだろう。お母さまの思いすごしよ）

しょうは、まだ、小娘だから、そのなにがの意味は、はっきりわからなかった。ただ、大人の世界では、禁断であるらしかった。うっとりとするような、あのいい気持が、なぜ、いけないのだろう。しょうの胸に小さな秘密が芽ばえたようであった。

鍊羊羹「夜の梅」で、名の知れわたった駿河屋は、しょうの父鳳宗七で二代目だった。祖先が堺から南へ半里ばかり離れた鳳村おとりの出なので、それにちなんで、明治になってから名付けた。漢学の素養があった宗七の気取りで、「ほう」と読ませたらしい。

「しょう子さんのところは、帰化人なの」

と、友だちから訊ねられたりした。

「お父さま、学校でからかわれるのよ。どうして、鳳なんて言いますの」

「今は泉北郡というが、もとは大鳥郡と言った。大きな鳥という字が当てられている。ここに鳳という小さな部落があつて、お先祖さまが暮しておられた。もっと、むかしは、大鳥郷おとりのかたと呼ばれていたということだ。大鳥神社がまつられているからじゃろう。この御社みやしろは和泉国いづみの一の宮で、したがって、格式高い官幣大社に列せられている。日本武尊やまとこをおまつりしてあるのじゃ。しょう、なんで、帰化人であらうぞ」

宗七は晩酌ばんしやくをかたむけながら、

「鳳という苗字みょうじはきらいか」

と、しょうに聞いた。鳳という字づらは、なんとなく、しょうも好きであった。

老舗駿河屋は京都の伏見が本店で、大阪の淡路町に駿河屋の分家があった。伏見から、この分家に派遣された大番頭に、越後生まれの実直な善六がいた。善六は宗七の父で、堺の甲斐町に駿河屋を開いた。

弘化四年生まれの父親宗七から、古い昔の話をきくのが、しょうのたのしみでもあった。母のつねは、同じ甲斐町に住んでいた阪上喜平の次女で、嘉永四年に生まれた。

明治三年、つねは宗七の後妻に迎えられた。先妻のあいだにできた長女で、次女のはながいた。明治五年に、長男秀太郎が生まれてから、つねは、なさぬ仲の子供たちが、ひがまないようにとひたすら心掛けて育ててきた。

鳳家は、代々、次男が家業を継ぐ、しきたりになっていた。しょうの父宗七も、次男に生まれたばかりに家業を継いでいた。

長男に生まれた者は、家の仕事から離れて、自由に好きな道を選ぶ特権があった。

しょうは、明治十一年の暮れも押しつまった十二月の七日に生まれた。

そのふた月前に、次男の恭二郎が夭折した。恭二郎をうしなった宗七の嘆きは、つねの眼にも異常と思われるほど深かった。

しかし、宗七の悲嘆は、自分が血をわけた恭二郎の死よりは、駿河屋の後継をうしなったということなのであった。

秀太郎を学者にするつもりであった。

「これで、駿河屋も減びるかもしれない」

宗七は、薄暗いランプの下で、寢床に肚はらばいながら、不吉なことを考えているらしかった。

「あの子が死んで、どんなにお力おとしかは、愚か者のつねにもわかります。しかし、これも前世の約束事でございましょう。ねえ、あなた、今度の子は、きっと、男の子にちがいありません。お腹はらのなかで、こんなにも、あばれまわるんですもの。それに、顔のやつれも、ひどいと言われますし」

臨月に近いつねは、ことさら、身だしなみに気をくばっていた。鉄漿かねをつけた齒なみをのぞかせた唇には、つよく紅べにがきわだっていた。腫がやさしく、うるんでいた。

「ねえ、ちょっと、手をお借しになって、突きあげて来るのは、お腹の子の腕でしょうか、脚なんでしょうか」

つねは、自分の寢床のなかへみちびきいれた宗七の手に、胎児の動きを触らせながら、

「ねえ、やはり、男の子でしょ」

と、やさしく言った。

「ばかな奴だな、お前さんという女は。生まれて見ないうちは、知れたもんか」

三女のしょうが生まれて、お七夜が過ぎると、宗七は家に居つかなくなった。しょうは三女だが、つねにとっては、はじめての女の子であった。

つねは産後の肥ひだちが悪く、ふた月ほどは床あげもできなかった。